

岡崎市議会議長 様

支出番号	
------	--

会派名
代表者名 加藤史朗

以下のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政 務 活 動 報 告 書

令和 7 年 6 月 5 日提出

活動年月日	令和 7 年 5 月 2 0 日（火）	
氏名	加藤史朗	
用務先 及び 内 容	1 5 月 2 0 日	用務先 額田郡 幸田町
		内 容 坂崎コミュニティライドについて
	2 月 日	用務先
		内 容 について
	3 月 日	用務先
		内 容
	4 月 日	用務先
		内 容
備 考		

政務活動報告書(行政視察)

幸田町

調査項目 坂崎コミュニティライドについて

ご対応

幸田町議会議長 廣野様

企画部企業立地監兼企業立地課長 鴨下様、企業立地課 小野様、大竹様

一般社団法人ライフアンドモビリティ理事 劔持様

■調査の意図

全国的に、また本市においても、地域内交通として有償型ライドシェアへの注目が集まりつつあるが、「交通空白地」該当の確認や、需給や収支等の継続性について課題が大きいと感じており、現実的には、導入ハードルの低い無償型のほうが使い勝手が良いのではないかと考えている。この無償型の取組として、本市と隣接する幸田町にて先駆的に取り組まれている「坂崎ライドシェア」について、実施に至った経緯と現状、成功の要因、課題を把握し、本市における導入におけるヒントといたく、調査することとした。

■坂崎コミュニティライドについて

●導入の経緯

・きっかけは、名大と幸田町との共同研究契約。高齢者の移動手段確保をテーマに、名大からボランティア輸送の提案があり、送迎実績のあった坂崎でやることになった。

●実施概要

・地区の老人会がなくなり、地区外の「おしゃべりサロン」、体操の会場への移動の足と、月に1回の「お買い物サークル」の移動の足として実施。

・高齢者27名が利用し、ボランティアドライバーは13名。高齢者2, 3名ずつで6つの班をつくり、各ドライバーが担当。

・ドライバーは地区の三役経験者を中心に、「坂崎のきずなをつくる会」を構成。毎月会議を行い、担当者の割り振り、実費支払い、地域課題の意見交換等を行う。

・「お買い物サークル」は、月に一回。予約は、端末等を使用するのではなく、前回の参加時に、その現場で次回の参加意向を確認する。

・利用者の負担はガソリン代実費のみ。この計算を、名大のシステムで行っている。デポジット金として年間千円を町に支払う。

- ・マイカーとした理由はコスト削減。専用車とすると購入・維持管理費負担があるため。
- ・保険は、400円／日・台の専用保険。名大と損保ジャパンで新たに創設。
- ・名大のシステム使用料、保険代は町が負担(年198万円)。町としては、サロン活動+移動は本来町がやるべきものだが、地元がやってくれている、という捉え方で費用を負担。
- ・長久手市、安城市(福釜町)で、坂崎を参考に同様の取組が令和8年度から社会実装予定。福祉部門が主体となり、介護保険事業の利用も想定されている。

●ポイント

- ・目的は「移動支援」ではなく「動くサロン」「高齢者外出促進」。コミュニティバスも一日3往復来ているため、この目的面ですみわけが図られた。
- ・ドライバーも高齢者ではあるが、働いている人も多く、「タクシー替わり」のやり方では、運営も続かない。
- ・「地域が仲良くなる」福祉の視点を中心に、行き先・イベントありきでの仕組みとした。

■所感

交通問題は、「交通弱者の足の確保」という視点がどうしても強くなり、困っている人の要望を受けて応える、という形のサービスや施策を考えがちで、今注目の交通空白地の有償ライドシェアのようなを整った仕組みに注目が集まっていますが、今回調査した「坂崎コミュニティライド」は、その考え方や持続性の限界を皆で認識し、あえて「移動支援」ではなく、一つの「サークル活動」として運営していることが、印象的で感銘を受けました。

例えば私の住む地域で、地域の人々の足を確保しようと、協力者チームを作り、マイカーでやれる環境を整え、予約システムをつくったとして、「時間も行き先もばらばらの依頼に対して運転者の割り当てが困難・・・」「実費等の計算や支払いも煩雑・・・」「結局利用が伸びない・・・」「運転者側も疲弊・・・」など、私自身、厳しい結果しか想像できませんでした。

しかしながら、今回の坂崎の取り組み方を知ったことで、いきなり仕組みから入るのではなく、例えば、「月に1回みんなで買い物に行こうか」「毎月第○金曜の夜は、駅前にみんなで飲みに行くか」「毎週○曜日の夕方は、高校生と話しながらドライブ(実際は送迎)するか」のような話をきっかけに、それを、毎回次回予約をとりながら続けていく、という方法が、取り組みを持続していくという意味で、非常に効果的ではないかと感じました。

やるとなれば、現実的な課題があると思われますが、移動のニーズもあまり多くないと思われる中山間地域の移動支援では、坂崎方式の導入は選択肢の一つとして頭に入つつ、各地域の地域交通の検討に臨んでまいりたいと思います。